

看護側から確認する臨床検査技師の病棟業務の取り組み

◎坂田 香織¹⁾社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院 看護管理室¹⁾

働き方改革における医師の時間外労働時間の上限規制適用が2024年4月に迫る中、A病院においても実効的なタスク・シフト/シェアを推進している。特に、医師からのタスク・シフト/シェアを期待されている看護師の業務については、特定行為研修修了者や特定行為を受けていない看護師であってもプロトコルを用いた包括的指示のもとに、診療の補助行為を実践し医師の負担軽減へ取り組んでいる。今回新たに取り組んだ臨床検査技師とのタスク・シフト/シェアでは、クリニカルパス導入などの経験より多職種での合意形成を構築できる体制が整備できていたことより、職種間の業務バランスを検討し効果的かつ効率的に役割分担を進めることができた。そこで、看護師の視点から臨床検査技師と協働した医師の負担軽減にむけた取り組みについて述べる。

まず、臨床検査技師の病棟常駐業務にあたり、医師や看護師のタスク・シフトについてどのような業務がタスク・シフトできるか医師、看護師、臨床検査技師、事務職によるワーキンググループを立ちあげた。医師を起点としたタスク・シフトだけでなく、それぞれの職種間でのタスク・シフトも包括的に検討を行ったうえで、医療の質や安全を担保できる病棟常駐業務の内容を検討した。その後、臨床検査技師の病棟見学研修を経て、病棟業務スケジュールを作成した。主な病棟業務は、平日日勤帯のベッドサイドでの心血管超音波検査、心電図検査の実施などとした。また、これまで課題であったカテーテル治療後の穿刺部合併症精査や緊急時の心臓超音波検査についても病棟内での検査実施とし、移送時の急変リスク回避や看護師のケアの中断を減らすことができた。このように、患者にとっての利益を共通認識し、医療の質や安全を担保するために職種間の相互理解を深め合意形成を図るプロセスは重要である。

次に、臨床検査技師へのタスク・シフトにより、看護業務はどのように変化できるか業務量調査結果をもとに検討した。業務量調査結果では検査搬送業務の約3割が削減でき、患者ケアへの介入時間の確保につながった。そこで、看護師は教育指導や意思決定支援へ、看護補助者は転倒予防のための見守り、排尿誘導など直接ケア業務への拡大に取り組んだ。さらに、医師のタスク・シフトとして説明の補助や特定行為実践により週8時間以上の医師の負担軽減が図られている。このような状況を看護師の柔軟で自立した働き方の創出につながる機会だと捉え、さらなる価値を生み出せるような意識改革につなげていく必要がある。

最後に、タスク・シフトによる変化を評価するためには、医療の質や安全性の担保の視点からモニタリングを行い、継続的な質改善活動へつなげることが重要である。今回、医師のタスク・シフトによるインシデント件数の増加は認めなかった。また、患者満足度向上まで結びつけることはできなかったが、症状出現時の迅速な検査対応により異常の早期発見や治療へつながった事例を認めた。このような職種間での取り組みにより、臨床検査技師と看護師とのコミュニケーションの機会が増加し、お互いの業務内容の把握や情報交換が容易に行える相互理解が進み、他職種との協働のあり方を学ぶ機会につながった。

多職種間のタスク・シフトによる業務の効率化は、私たち医療者が目指す患者中心の医療や利益につながると考える。今回の取り組みは、医療の質や安全を担保するために職種間の相互理解を深めチーム医療を推進したことにより実現した。今後も看護管理者として、看護の専門性の発揮に資するタスク・シフト/シェアの取り組みを推進することで、看護師がより働きやすくやりがい感をもてる環境整備と、患者の安全性の担保や医療のさらなる質向上につなげていきたい。

連絡先：社会福祉法人 恩賜財団 済生会熊本病院 看護管理室

電話番号：096-351-8000